中国ステップファミリーの教育における問題
－継親と実親の役割分担－

蘆　子洋　（発達教育学研究科）
表　真美　（教育学科）

中国では、離婚・再婚率の上昇に連れて、ステップファミリーの数が増え、ステップファミリーの教育問題が課題となっている。本研究はステップファミリーの４人の若年成人子を対象として、オンラインによる半構造化インタビューを行い、文字化された質的インタビューデータをSCATの分析方法に従い、分析した。その結果、親と実親の役割分担に基づく子供の教育問題とニーズについて、子供が望ましい親役割は①不公平を感じさせない取り組み、②継親子関係の調和に力を入れる、③子供が事実を知る権利を確保する、④子供の期待に気づき、付き合いのパターンを変える、⑤継きょうだいの年齢差や男女差に気を配る、の五つが明確となった。

キーワード：再婚，中国ステップファミリー，家庭教育，親子関係，親役割

１．研究目的

中国でステップファミリーに関する研究は非常に少ない。ステップファミリーは社会的に可視化されることのないまま社会に潜在してきた家族形態だと言える。本研究は若年成人子を対象としたインタビュー調査を行い、継親と実親の役割分担に基づく子供の教育問題とニーズについて分析･考察することを目的とする。ステップファミリーの教育における問題に対して社会の注意を喚起したいと考える。

２．研究背景：中国における結婚と家族

中国の伝統的な社会では、家族は社会生活の中核であり、社会システムの基盤である。中国の社会構造の礎、社会システムの原型、社会秩序の要素を形成するのは個人でも集団でもなく家族である。中国の伝統的な家庭文化では､「多子多福」（子供が多ければ幸せである）を推奨しており、夫婦で４～６人の子供を育てるのが一般的であった。

現代の中国の家族は世帯が小さく、核家族化が進んでいる。核家族の構造そして、現代の家族のもう一つの特徴は都市部での共働き家庭が多いことである。久保ら（2018）は、中国では隔世育児という言葉があり、祖母が孫の育児を担い、母親（娘や嫁）が就労するという習慣があると指摘している。隔世育児は，母親の子育ての負担を軽減し、祖父母世帯と若い世帯との二世帯団欒という楽しみがあり、子育て支援のひとつとして中国では一般的である。隔世育児は中国で普及しているスタイルであり、家庭教育における「中国的特色」と言える。現在では、家族の形態も多様化している。異性間の血縁関係で繋がる伝統的な家族に加え､養子縁組家族、里親家族、ひとり親家庭、同性間家族など多様な家族の形がある。

2020年に民政部が発表したデータ『2019年民政事業発展統計公報』によると、2019年の結婚率は6.6％で前年より0.7％低く、離婚率は3.4％だが前年より0.2％高く、さらに年間を通

じて 927 万 3000 件の婚姻が法的に登録され、471 万 1000 件の離婚が処理され、結婚対離婚の比率は 50％を超えている。国家統計局より、智研諮詢会社作成のデータによると、中国の再婚者数は 6 年連続で増加しており、2019 年の再婚者数は 455 万 9400 人で、前年と比べて 26 万 7200 人を増加し、6.23% に増えた。

中国の婚姻法について、2021 年 1 月 1 日から「中華人民共和国民法」が施行され、民法の離婚クール期間制度の規定を貫徹するため、民政部は婚姻登録手続きを調整し、離婚手続きにクール期間（30 日）を追加した。現行婚姻法は、離婚手続について、当事者の合意による協議離婚と裁判所が介入する裁判離婚に分けて定めている。中国では広義の監護という概念を採用しており、現行法には「親権」という用語が明文化されておらず、親権制度も完備していない。継父母と継子の関係は、養育教育関係になるかどうかで異なる。養育教育関係の形成は『婚姻法』第 27 条および中国司法実務の事件の具体的な状況に即して判断されるべきである。

このような社会背景において、離婚と再婚は珍しくないことになった。したがって、新しい家庭構成であるステップファミリーが段々増えている。ステップファミリーとは、配偶者の少なくとも一方の結婚前の子供と一緒に生活する家族形態であり、血縁関係にない親子関係が 1 組以上含まれるものをいう（山田昌弘 ,2007）。野沢（2005）は夫妻のいずれかあるいは双方が、以前のパートナーとの子供を連れて再婚することによって形成された家族をステップファミリーと定義している。夫婦の婚姻より前に実親子関係が成立しており、家族内に継親子関係を含むことなど、初婚家族とは構造も発達の仕方も異なる点に特徴がある（SAJ，2017）。王訳若（2017）は、ステップファミリーの定義をより包括的に示しており、ステップファミリーとは、配偶者の少なくとも一方が、何らかの理由で離婚した後、1 人以上の子供を連れて新しいパートナーと家族を再形成するもの、または共通の子供を持った後に新しいパートナーと一緒に暮らす可能性のあるものであると論じている。

3．先行研究

3.1　中国、日本、アメリカの家族観

ここでは、日本やアメリカの先行研究も含むため、まず日中米の家族観を考察する。

中国は伝統的に個人主義より集団主義を重んじてきた。中国人が安心感を得るのは、集団を通じてのみである。そして、中国の家族は血縁の単位であり、一族の継承と生命の存続のための機能的な単位と考える傾向がある。黎（2014）によると、血縁関係がなければ、家族や一族は存在しなくなる。だからこそ、中国の倫理観である「孝は徳の第一」「親不孝には三種類あり、子供を残さないのは最悪の親不孝」という考え方が最も重要なのである。

同じアジア国家である日本も儒教思想に影響を受け、集団主義的である。しかし、日中両国の集団主義の根本的な違いは、日本は「忠」に基づく集団主義であるが、中国は「孝」に基づく集団主義だということである。構造上では日本の家族は血縁関係のある成員だけではなく養子になる婿や奉公人のような血縁関係のない成員も含まれる。明治以降、家長である父親に権限が集中し、その子供、特に女子の婚外の性的関係を統制し、結婚相手を決定する傾向が強まった。一度結婚したら、離婚は避けようとする態度が社会に浸透していく。そして、離婚に対する否定的意味づけが広まった。戦後、婚姻の安定性を強調する価値観は持続し、離婚・再婚を抑圧・抑制する変化は基本的継続した（野沢・菊地 ,2021）。

アメリカの家族観は、ヨーロッパの伝統的な文化に影響されている部分がある。そのため、比較的、アメリカ人は冒険好きで革新的である。また、親子間の権威主義的な関係も少なく、ほとんどの場合、親子は対等である。アメリカ文化の核は個人主義である。名誉と個人主義的なヒロイズムを好み、成功を追い求める。アメリカでは結婚率が減少しているにもかかわらず、離婚が多いため再婚が多い。2008 ～ 2012 年の 60 ～ 69 歳の既婚男性の約 34％が

2 回以上の結婚を経験しており、既婚女性の約30％が 2 回以上の結婚を経験している（Lewis & Kreider, 2015）。最近の研究では、米国の世帯の 30％が成人の継子や継親とのつながりを含んでいると推定されている（例えば、世帯内に継子を持つ成人や、他の世帯に継親を持つ子供など；Wiemers, Seltzer, Schoeni, Hotz, & Bianchi, 2019）。離婚・再婚・同棲も普遍的な現象となっている。

3.2　ステップファミリーの構造

ステップファミリーの構造は、その組み合わせから様々な形態が存在している。例えば、初婚継母×再婚実父＋実子、再婚実母＋実子×初婚継父＋再婚後の子、子連れ再婚同士など。また、未婚シングルペアレントが結婚する場合や事実婚カップル等多数の形態が確認されている。ステップファミリーには「インサイダー（部内者）」「アウトサイダー（部外者）」という役割が存在する。インサイダーとは内側にいる実親，アウトサイダーとは外側にいる継親を指すことが多い。健全な初婚家族の場合、母親が子供と親密でインサイダーになり、父親がアウトサイザーになるものの場面ごとに夫婦間でインサイダーとアウトサイダーが容易く入れ替わることもできる。しかし、ステップカップルの場合、特にアウトサイダーは、強固な実親子に張り合い、疎外感や孤立感、嫉妬や存在を無視されていると感じる一方、インサイダーは愛する人たちの間で引き裂かれるような思いをし、このような状況に不安を抱く（小榮住 2020）。

3.3　継親子関係と実親子関係

ステップファミリーを支援するＳＡＪ（Stepfamily Association of Japan）のハンドブックには、ステップファミリーが新しい家族としてまとまるのに最低でも 4 年かかることが指摘しされている。

社会学者の費孝通（1948）は、中国の農村構造の研究の中で、「各家が自分の位置を中心として、その周りに円を描き、この円の大きさは中央権力の厚みに依存する」、「他者との社会的関係は、集団の中の分子のように一平面上にあるのではなく、水の波紋のように円を描いて押し出され、どんどん遠くへ、そして薄くなっていくのである」という意味の「差序格局」の概念を提唱した。このように、人は自分を中心とした輪を持ちながら、同時に自分より目上の人を中心とした輪に従属する。人々が他者に有利な資源を配分するよう求められたとき、まず考えるのは、お互いにどのような「関係」を持っているかということである。そこで黄光国（1985）は、中国人の「差序格局」から、人間関係は感情型、道具型、混合型の 3 つに分けられると指摘する。家族関係や友人との関係はこれらは典型的な感情型関係とみなされ、「需給の法則」に基づいている。典型的な道具型関係は、見知らぬ人との関係であり、「公平の法則」に基づいている。 典型的混合型関係は、「人情の法則」が通用する知人の関係である。ステップファミリーにおける継親と継子の関係は、感情型かつ道具型関係である。初婚家族では、必要な人には必要なものを与えるという「必要性の法則」があり、誰が多くても少なくても、気にしない。初婚家族とは異なり、ステップファミリー家族はより「公平の法則」に従い、見知らぬ人を家族に加えることで、物質的な家族資源の分配だけでなく、傍にいる時間の長さといった感情的な面の比較と「合理性」が重視される。

野沢ら（2014）は若年成人継子を対象としたインタビュー調査と、それに基づいた探索的なケース分析を行った。調査で得られた 19 ケースは①親として受容、②思春期の衝突で悪化、③関係の回避、④支配忍従関係から決別、⑤親ではない独自の関係発達の 5 つの類型に分類され、「継子が継親を親とみなすのかどうか」、また「継親自身も継子の親として振る舞うのか」が分類の重要な軸として浮上した。

また、野沢（2015）は同居親の再婚やステップファミリー生活における同居親の反応（言動）をどう認知・評価したかに関わる部分に焦点化して分析した。その結果、①「柔軟な仲介者・擁護者である親に肯定的な評価」を示した

グループ、②「継親の側に立つ親に対する失望・疎外感」を感じているグループ 、③「自分を気遣わない親への不信・距離化」を示したグループの 3 類型を析出した。調査の結論として、ステップファミリーにおける同居親は，子供が疎外感を募らせないよう配慮し、親子のみの共有時間を確保したり、親によるしつけを継続したりして、子供が継親との関係を作る際の保護・仲介・調整という（初婚家族とは異なる）親役割を担っていることを理解するための社会的機会が必要である。したがって、調和のとれたステップファミリーを形成するために、良好な実親子関係は肝要な点である。

3.4　子供の喪失と忠誠葛藤

実際、実親子関係は再婚初期では非常に危ういものである。再婚によって、家族間で過ごす時間が変化することは否定できない。ステップファミリーの中で暮らす子供たちの経験に関する質的研究では、親子の時間が失われ、子供に注意を向けられなくなることが大きなテーマとして浮かび上がる（Cartwright, 2008）。ステップファミリーの子供たちにとって、二つ目の大きなチャレンジは忠誠葛藤という問題である。「もし、私が継母 / 継父を愛したら、私は自分のお母さん / お父さんを裏切ることになる」。子供たちの喪失については文献に書かれ始めたばかりではあるが、臨床家や研究者たちは数十年の間継子の忠誠葛藤について論じてきた（Pasley & Lee, 2010）。忠誠葛藤はほとんど遺伝的に組み込まれているかのように見える――友好的にお互いに納得して離婚したとしても、子供たちは継親と会う時に「罪」の意識や「不誠実」だと感じることが報告されている。しかしながら、実親への葛藤がこうした拘束をより耐えられないものにする。子供たちは非常に多くの場合、彼らの忠誠葛藤を表現する言葉を持たない。このことは、大人が子供の忠誠葛藤の存在によく思いを寄せる必要があることを示唆している。

3.5　ステップファミリーの親役割

親役割とは「親の意識や行動面を含む親としての役割つまり一人の人間を生み，養い，社会的に一人前になるまで育てる仕事を総括したもの」（野澤, 1989）である。普通の初婚家族では、子供が生まれると、妻と夫は自然に「母親と父親」になり、それぞれの親役割を果たす様になる。しかし、ステップファミリーの場合、家族構造は複雑になり、同居する継親や実親と別居する実親が存在し、親役割はこの三人で分担する必要がある。

ステップファミリーの子供は明らかに役割分担の問題に直面しており、二人の父親と二人の母親、多数の兄弟姉妹や、再婚による複雑な親族関係（祖父母など）がある。そのような家庭で暮らす人々は、複雑な家族関係を調整する問題に直面するだけでなく、大きな心理的プレッシャーも抱えているのである。その一方で、家族関係においてより多くの経験を積み、新たな家族の役割を担い、感情的な問題など複雑な人間関係の問題に対処できるようにある。

ステップファミリーでは、「カルチャーショック」という問題もよく存在している。家族文化の衝突は、双方に子供がいる場合、とくに子供の教育やしつけをめぐる方針や価値観の対立という様相を呈する。例えば、学校の成績と受験勉強を重視してきた家庭の価値観と、礼儀や家事手伝いなど生活の自立を重視してきた価値観が、夫妻間で厳しく対立した例があった。このような状況では、再婚家庭の夫婦は、自分たちの家族観や習慣に従って生活しながら、パートナーの家族文化を受け入れる必要がある。「カルチャーショック」の解消はステップファミリーの独特な親役割の一つだと考える。

3.6　ステップファミリーの類別

野沢・菊地（2021）はステップファミリーのかたちを「代替モデル / スクラップ＆ビルド型」と「継続モデル / 連鎖拡張するネットワーク型」に分類している。

① 「代替モデル / スクラップ＆ビルド型」では、継親を「親」として位置づける代わりに、別居親の存在は無視あるいは軽視されている。

子供に継親を「親」として受け入れるように求める。大人側が主導して、「家族」を再建しようとする。この結果、子供は実親のひとりとその親族との関係をまるごと喪失する。継親は実親に代わって実親のような役割を果たすことが期待されている。また、子供のもう一人の親は子供の人生から姿を消すものと想定される。

②「継続モデル/連鎖拡張するネットワーク型」では、親子関係やそれ以外の親族関係（祖父母との関係など）が親の再婚などによって失われることなく継続することになる。両親の離婚・再婚に伴って、家族・親族関係が切れるのではなく、増えていく。「家族」の境界線が「世帯」の境界線と一致しない。別居している親も子供の親としての役割を継続することが期待される。したがって、継親は別居親に入れ替わるのではなく、親とは違った、おじさんやおばさん・友達のような存在となる。

欧米においては、長年にわたる制度改革によって「継続モデル / 連鎖・拡張するネットワーク型」が多数派を占めるようになった。日本では、現在も面会交流の実施率が低く、「代替モデル / スクラップ & ビルド型」が多数派であり続けているように見える。一方、中国のステップファミリーに関する研究は少ない状態で、主なステップファミリーの類別は明らかにされていない。

子供たちの視点から見た親の離婚・再婚過程の経験は、「代替モデル／スクラップ＆ビルド型」を当然視する同居親には理解してもらえないと考える子供たちがいる。同居親との利害対立や葛藤がときに大きくなり、同居親だけでなく、別居親および継親のいずれとも支援的な関係が築けずに子供が孤立するケースもある。一方、日本の制度を反映した多数派の「代替モデル／スクラップ＆ビルド型」の束縛を脱した親が柔軟に対応したケースでは、子供たちの適応がより容易になることが調査から示唆された（野沢・菊地 2021, 菊地 2021）。子供のもうひとりの実親との関係が失われる「代替モデル / スクラップ & ビルド型」では、継親子間や実親子間の葛藤が高まり、子供の適応が難しくなるリスクが指摘されている。現在社会では、「継続モデル / 連鎖・拡張するネットワーク型」を積極的に取り入れる必要がある。

4. 研究方法

本研究は 2022 年 2 月～ 2022 年 5 月に、4 人を対象にインタビュー調査を行った。インタビューの方法は，オンラインによる半構造化インタビューである。

質問項目は以下の六つである。

①親の離婚や再婚の経緯とその受け止め方
②継親との関係とその変化
③親の離婚（死別）後に同居した親や別居した親との関係
④きょうだい関係、継きょうだい関係
⑤祖父母、継祖父母などの親族との関係
⑥期待する継親子関係、実親子関係

インタビュー時間は 40-90 分で、平均 65 分である。中には①から⑤までは、野沢（2015）「ステップファミリーの若年成人子が語る同居親との関係—親の再婚への適応における重要性—」のインタビュー質問項目を参考した。

この調査の協力者は、表 1 のように、親の再婚（事実婚を含む）を経験し、成人前に継親と同居（あるいはそれに近い継親との生活上の関わり合い）を経験した 4 人のケースである。調査参加者となった若年成人継子 4 人の性別構成は、女性 2 人、男性 2 人である。最終学歴は，大学院在学中 2 人，四年制大学卒 2 人である。

表 1　分析対象一覧

仮名	年齢	性別	職業	家族構成(同居)					現在住居状態
				実親	実親の職業	継親	継親の職業	継きょうだいの有無	
W	24	男性	学生（大学院）	実母	会計士	継父（事実婚）	会計士	継父の別居の子（女）	寮
L	21	女性	車販売員	実母	専業主婦	継父	テレマーケティング	継父の子(女1人男1人)	実家暮らし
F	25	女性	バーのオーナー	実父	起業家	継母	専業主婦	継母の子（女）	一人暮らし
C	24	男性	学生（大学院）	実母	保険事務	継父（事実婚）	建築におけるプロジェクトマネジメント	継父の別居の子（男）	寮

インタビューの録音データを逐語的に文字化し，文字化された質的データの分析にあたっては，SCAT（Steps for Coding and Theorization）の分析方法に従い、分析する。SCATでは，マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し，そのそれぞれに，

<1> データの中の着目すべき語句

<2> それを言いかえるためのデータ外の語句

<3> それを説明するための語句

<4> そこから浮き上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく4 ステップのコーディングと，<4> のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し，そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。(大谷 , 2007) この手法は, 一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの, 比較的小規模の質的データの分析にも有効である。本稿も小規模データのため、SCATの手法を取り入れ、分析する。

大谷は、SCATが誰にでも活用できるように、データの入力用のフォームを公開している。本稿でもそれを用いて作成し、継親と実親の役割分担を検討する。

4. 調査結果

4.1 調査協力者Wの事例

(家庭状況と家族構成について)

小学校2年生（2005年）で両親が離婚した。実父は小学校3年生の時（2006年）に最初の継母と再婚し、2010年に子供を産んだ。2015年、実父は最初の継母と離婚し、新しいパートナーと結婚した。高校の三年間の寮生活を除いて、中学校まで実父と最初の継母と暮らしていた。2016年、高卒し、実母と一緒に暮らすことになった。実母はその時、結婚したパートナーがいた。2017年、実母が離婚し、今は結婚していないパートナーがいる。

表2に示すようにSCATによるWのインタビューデータの分析をおこない、ストリートラインと理論を記述する。他の三人も同じ手順で分析を行った。

①ストーリーライン

Wさんの家には財産分配の問題があり、自分の利益を保証できない不安な状況で生活している。住宅は最初の継母（他の人）のものになる恐れがあり、実父はWさんに対し、不公平だと感じている。実父、継母と生活する時、父親が調整・仲介者の役割を担わないので、W

表2　SCATによるWのインタビューデータの分析（一部抜粋）

番号	発話者	テキスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念	<5>疑問・課題
4	W（24歳男性）	ない。一緒に暮らしている感覚だけです。父も私たちの関係を緩和しようとするようなことはしません。私は敵を作るのが嫌いなタイプなので、みんなでやるべきことをやればいいです。ただ、私に迷惑をかけないように、それぞれの道を歩むことになります。	父も私たちの関係を緩和しようとするようなことはしません，敵を作るのが嫌いなタイプ，やるべきことをやればいい，それぞれの道を歩む	父が継母と私の関係を調節しない、放置された，穏やかな人間関係を好む，自分のことは自分ですべき，継母のことは私と関係ない	父親の仲介役，継母に無関心，継兄弟に無関心，家族ではない単なる同居人	調節・仲介者の失格，継親や継兄弟に対する家族感情・家族愛が感じない	やるべきことは何を指す？

さんは継母や継きょうだいに対する家族感情・家族愛を感じていない。継母の責任範囲は継母の実子だけだと思い、再婚によってもたらされる家族関係の変化を認めていない。実母(別居)との面会交流に関して、継母が干渉してはいけないと思っている。信頼関係を構築していないので、継母に対する先入観が嫌悪感・抵抗感に変化している。継母と実母をよく比較し、継母は余計なことをしやすいと考え、継母に対する評価が厳しくなっている。

②理論記述

・実親は財産分配の時、子供の利益を保証する責任がある。
・ステップファミリーの中に「自他」の関係区分を作る傾向があるので、不公平を感じさせないような取り組みが必要である。
・同居親はパートナーと子供の関係を調整する必要がある。
・継母や継きょうだいに対する家族感情・家族愛を感じないから、子供は再婚によってもたらされる家族関係の変化を認めない。
・継親は実母（別居）との面会交流を干渉してはいけない。
・継母に対する先入観を解消するために、信頼関係を構築する必要がある。

4.2　調査協力者Ｆの事例

(家庭状況と家族構成について)

２歳半の時に両親が離婚し、小学校までは祖母と祖父に育てられた。小学生の頃、両親が再婚し、継父、継母ともに実子が一人いるが、どちらも離婚した相手に育てられた。小学生の時、実母の傍に戻り、雲南省で継父と３人暮らしをすることになった。中学生になると、故郷の黒龍江省に戻り、そこの中学校に通うことになった。中学校の時、実父と一緒に暮らすことではなく、寮に住んだ。高校の時は、実父と継母と一緒に生活した。ただし、主に寮で暮らし、週に１度家に帰る生活を送っていた。高校卒業後来日し、日本の大学で勉強し、一人暮らしをした。そして、そのまま日本で就職した。

①ストーリーライン

Ｆさんは父母離婚後、実父との面会交流はない,実母の指示に従って継父の称呼を変更した。また、実母の言葉を聞いて離婚はすべて父親のせいだと思った。その後、実父と同居し、実父に対する了解を得てから両方の親との連絡を今まで取っている。実父との共有時間を干渉したい継母の行為を見て、抵抗感が高まった。継母も実父がＦさんに高い生活費をあげることに対して反対意見を持つ。食生活に関して、継母はわざとＦさんを困らせる。Ｆさんは継親子関係の主導者が継母であると思い、彼女との接し方がわかない。継母は実子とＦを比較する傾向がある。実母の調整で継父との関係がよくなるので、実父の調整を期待している。家庭の経済状況に関心があり、実父からの経済支援が重要だと思う。継母と感情的交流がない。気まずい雰囲気になったことがあるので、継母と対立する状況でなる。

②理論記述

・子供の気持ち・意欲を考え、実父（別居）との面会や交流を確保してほしい。
・同居親は別居親の悪口をしてはいけない。子供は本当のことを知る権利がある。
・同居親は継親子関係を調整する必要がある。
・称呼を変更する時、子供の意欲を無視できない。
・継親は実親子の面会交流に干渉するべきではない。
・家族の経済的資源は、意見が一致した後に配分されるべきである。
・継親子関係の主導者は継親だと感じる。
・継親は、継子と実子を比較することを求めない。

4.3　調査協力者Ｌの事例

(家庭状況と家族構成について)

中学２年生のとき､両親が離婚した。その後、実母と暮らし、実父との連絡が少なかった。二年後、実母は友人の紹介で再婚した。継父には、継兄と継妹の２人の子供がいる。継妹は今結婚して家庭を持っている。現在、仕事があって、実母、継兄、継父と暮らしている。

①ストーリーライン

継父が実母にやさしいから、Ｌさんは彼を受け入れて信頼関係を構築した。年齢が近いから継兄弟と仲がよい。特に継父の娘と親しい親友になった。父母離婚の原因を詳しく知り、思春期の娘と実父の距離感の存在があるので、元々実父との関係が良くない。そして、長年実父から養育費や学費をもらっていないことや親子愛を感じないから、養育義務を果たさない実父に失望した。実父と同居している祖母や姉の行動はさらに関係を悪化させ、父娘関係が疎遠になった。実母の再婚は家庭内の経済的安定をもたらした。また、継父はＬさんの仕事や恋愛の相談相手として役立っている。その後、継親子間の呼び方が変わることで調和のとれた再婚家庭への再構築が容易になった。

②理論記述

・継親との信頼関係を構築するために、実親の介入の必要がある。
・継親からの経済的支援や相談相手の役割は子供に受け入れてもらえる。
・別居親は養育義務を果たさなければならない。
・子供に離婚や再婚家庭の原因を説明することで、子供の理解を得られる。
・継親は、子供が自分自身を感情的にすぐに受け入れることができないかもしれないことを納得する。
・家族がお金や時間などの限られた資源を合理的かつ公平に配分できるよう注意する。
・継兄弟の性別問題は無視できない。

4.4　調査協者Ｃの事例

(家庭状況と家族構成について)

２歳の時に両親が別居した、父方の祖父母と一緒に住んでいた。5歳の時、両親が正式に離婚した。 離婚後、中学生までは祖父母のもとで暮らしていた。中学二年生の頃、実父が再婚した。継母と一緒に生活したことがない。経済的な理由で、中学二年生から実母のもとで暮らし、今に至っている。その間、一時期は実父や祖父母の家で生活したが、ほとんど母の家にいる。実母はＣさんが大学４年生の時にパートナーを見つけ、今は実母とパートナーの家、または大学の寮で暮らしている。

①ストーリーライン

父母が離婚した後、父方の祖母の影響で実母に対するＣさんの態度が乱れる。大きくなったら実母と仲直りをした。家族変化の原因を知る権利があると思い、離婚しても、両親ともに子供の世話をする必要があると主張する。実父の再婚のため、不本意ながら遺産相続における継兄弟のトラブルに巻き込まれた。Ｃさんは実母と同居した後、実母がパートナーを求める気持ちは理解できるが、心の準備がまだできていない。実母のパートナーを受け入れる時間がほしい。継親子関係の改善に実母の介入が必要だと思う。学業に専念しながら、実母や実父（と祖父母）といる時間を分ける必要があるので、ストレスを感じていた。

②理論記述

・子供の判断は干渉してはいけない。子供には真実を知る権利がある。
・遺産相続における継兄弟のトラブルに巻き込まれる子供の気持ちを理解する必要がある。
・ステップファミリーになることはプロセスであるので、子供の心の準部をできるまで時間がかかる。
・２人の実親とのコミュニケーションが重要である。
・子供は血縁関係のない継親子関係には必ず天井があると考える。
・同居親と別居親は子供の最善の利益を考慮し、行動すべきである。
・同居親は継親子関係を調整する必要がある。
・子供の意思決定を尊重しないと、ストレス源となる家庭環境になるかもしれない。

５．考察

5.1　継親子関係からの分類

分析の結果により、前述の継親子関係の５つの類型（野沢・菊地，2014）で分類すると、継親を親として受容のケースが１人、関係の回避のケースが２人、親ではない独自の関係発達のケースが１人であった。また、４人の家族

をステップファミリーのかたち（野沢・菊地, 2021）に分類したところ、「代替モデル」が３つ、「継続モデル」が１つあった。対象者のうち３人は、家族内の物質的資源の分配、財産の分配に関心があった。対象者の４人とも、実親による継親と子供（対象者）との関係を調整することが必要と感じていた。継親に期待することは対象者により異なった。４人の継親との同居期間は異なるが、中国の高校で始まった寮生活の影響により長くはない。

5.2　中国ステップファミリーの子供が望ましい親役割

1）不公平を感じさせない取り組み

４人のインタビュー対象者のストリートラインを整理すると、全員が多少、家族の財産配分や離婚した両親の財産分与について言及している（＜＞部は <4> テーマ・構成概念を示す）。W さんの場合では、直接養育者である実父は離婚した後、二回再婚した。実父は最初の継母と離婚した後、その継母は今まで W さんの住宅に住んでいる。実父は W さんに＜不公平＞だと思い、＜Wさんの利益を保証できない＞と不安を抱く。F さんの継母は、実父から支払われる生活費が高額であることに＜不満＞を持っていた。しかし、実父は＜生活費を出す＞ことをやめず、彼女の起業を応援していた。L さんは離婚の際の財産分与で実母が何ももらわなかったことを知っていた。そして、長年実父から養育費や学費をもらわないことや＜親子愛＞を感じないことから、＜養育義務を果たさない実父に失望した＞。C さんは実父の再婚のため、不本意ながら＜遺産相続における継兄弟のトラブル＞に巻き込まれた。

以上より、ステップファミリーの中に「自他」の関係区分を作る傾向があると推測できる。子供は継父母を「他人」、自分と実親を「自分」として扱う。この場合では子供は「公平の法則」に従い、物質的な家族資源の分配だけでなく、教育や感情、親子の共有時間の分配などの「合理性」をさらに重視する。再婚家庭の人間関係ネットワークは一般家庭より複雑であり、資源が限られているため、資源が分散される可能性が高くなる。すべての関係者の要望を同時に満たすことは容易ではない。資源の分配から生じるトラブルが発生する前に、納得することができる説明など、家族メンバーの要望のズレに対応する方法も身につける必要がある。

2）継親子関係の調和に力を入れる

ステップファミリーでよく問題になるのが、継親と継子の疎遠化である。この現象には、誰も驚かない。一般的には、血のつながりがない以上、疎遠になるのは仕方がないとされている。これは一見合理的に聞こえるかもしれないが、実は「愛」を血縁の境界線に限定しており、血縁関係がない親子関係にも深い感情がある現実を説明できていないのである。

聞き手：お父さんとの関係がうまくいっていないんですか。

W：関係が悪いというより、彼が私のことを全然気にかけてくれないんです …… 母のように私をしつけないことです。父は基本的に私のことを気にしていない。なぜ離婚の時、私を連れるのかは分からない。

実際、離婚した親の多くは、W さんの実父のように子供に対する内心の罪悪感から、子供の教育に対してより緩やかで寛容な態度を取る傾向が見られる。これは再婚家庭に多いが、実親はやましい気持ちがあるために子供に甘くなり、その子供が継親に反感を持たれ、家族間の争いに発展することがある。W さんは実父、継母と生活する時、実父が＜調整・仲介者の役割＞を担わないので、W さんは＜継母や継兄弟に対する家族感情・家族愛を感じない＞。W さんは＜継母の責任範囲が彼女の実子だけ＞だと思い、＜再婚で生じた家族関係の変化＞を認めることができない。信頼関係を構築していないので、継母に対する＜先入観が嫌悪感・抵抗感に変化した＞。W さんは＜継母と実母を比較＞し、継母は余計なことをしやすいと考え、＜継母に対する評価が厳格化になった＞。中国

の家族観やマスメディアの影響で、W さんは継母の役割に偏見を持っている。 W さんは実母との関係が良好で、実父が再婚して継母と同居するようになってから、実母を裏切ったと感じたのかもしれない。 W さんの父親もパートナーと子供の関係において仲介役を果たしていないので、継親子の緊張関係が取り返しのつかないことになった。ステップファミリーの親子関係を疎外する最大の原因は、忠誠心の葛藤である。

F さんは＜実母の調整で継父との関係がよくなる＞ので、実父の仲介役にも期待している。継母と＜感情基盤がない＞こと、よく＜気まずい雰囲気＞になったことがあるので、継母と＜対立＞する状況になる。F さんは、小学生の頃、実母と継父と同居していた時期があり、その間、実母の仲介により継父との関係は良好であった。F さんによれば、来日後も、実母や継父とは定期的に電話で連絡を取り合っていたとのことである。実父は継母との関係に干渉せず、F さんは中学時代に一緒に暮らすことに気まずさを感じていた。継母の悪い挙動（好まない料理を提供する、父娘の時間を邪魔する、実子と継子を比較する）により、継親子の対立が長く続いたのも事実である。したがって、ステップファミリーが新しい家族として成り立つために、実親がパートナーと子供の関係を調整し、信頼関係を構築させることは効果的かつ重要である。

3）子供が事実を知る権利を確保する

F さんと C さんのインタビューデータの分析における結果の理論記述（表 4、表 8）の中で、「同居親は別居親の悪口をしてはいけない。子供は本当のことを知る権利がある」と「子供の判断は干渉してはいけない。子供には真実を知る権利がある」ということが書かれている。離婚において、子供たちは十分な情報を得て、深くコミュニケーションをとることを選択する権利がある。婚姻生活が崩壊すると、多くの人は自分の失敗を相手のせいにしたがるが、婚姻生活の崩壊や破綻は、多くの場合、双方に原因があるのである。その際、子供の心に憎しみの種をまかない、相手のイメージを壊して子供の愛と承認を競うようなことはしないことが大切である。離婚後も争いがあるとしても、子供たちの心の中にある親のイメージを損なわないように対処する必要がある。この段階のコミュニケーションでは、親が子供に事実を言うことが重要である。

4）子供の期待に気づき、付き合いのパターンを変える

4 人のインタビューから、それぞれの子供が継親に求めるものが違うことがよくわかる。W さんは継母に自分のことをやってほしい、しつけはしないでほしい。また、継母が自分に困らせないでほしいと思った。F さんは継母に普通でいてほしい、継姉と自分のことを比べないでほしい。L さんは、継父には、実母に優しくするだけで、自分の世話をしなくてもいいと思っている。C さんは寮生活で、実母のパートナーと同居している時間はほとんどない。実母のパートナーには、すぐに子供の父親の役割を押し付けず、慣れるための時間を与えてほしいと思っている。そして、継親が、家族の経済的な助けになる役割を期待している。

ステップファミリーの各メンバーの役割に合理的な期待を持つことが、新しい家庭を築く第一歩となる。ステップファミリーの葛藤の多くは、お互いの役割に対する失望が原因である。したがって、家族に対する期待を定期的に振り返ることは、互いのニーズを見て対応し、互いのペースに合わせ、お互いの不満を軽減することにつながるのである。また、継親は継親子関係の主導権を握るので、継親に対する子供の期待に気づき、付き合いのパターンを変えるのが重要である。

ステップファミリーの夫婦と子供は、社会の発展に合わせて、お互いの役割に対する期待を調整する必要がある。お互いの期待が一致から不一致へと変化し、相互の融和と調整によって徐々に一致に戻るのを見るには、平和的で理解ある態度が必要である。このようなステップファミリーの生活体験は避けられないものだ

が、同時に調和した人間関係を維持・向上させるためのプロセスでもある。

5）継きょうだいの年齢差や男女差に気を配る

欧米の研究でも継兄弟の絆について調べた研究はわずかで、一般に継兄弟は実の兄弟よりも親密でなく、支援的な関係でもないが、実の兄弟よりも関係における対立や攻撃性が少ないことが分かっている（Campo, Fehlberg, Millward, & Carson, 2012; Mikkelson, Floyd, & Pauley, 2011）。Ihinger-Tallman（1987）　は、義兄弟は以下のような場合に親密な関係を築く可能性が高いと仮定している。(a）頻繁に連絡を取り合い、(b）経験を共有し、(c）年齢、性別、経験、価値観が似ており、(d）資源の交換を励まし，競争を抑えた家族を持ち、(e）新しい継家族に公平性を感じている場合、親密な関係を築く可能性が高いとした。

四人は以下の語句を用いて、継きょうだいのことを表現している。

Wさん：「あまり愛情を感じない」「弟を他人にはあまり言わない」
Ｌさん：「妹と私は共通点が多く、今では親友のように仲良くしています。兄に言うことはあまりない。彼は実の妹と同じで、男の子と女の子では共通の話題が少ないのでしょう」
Ｆさん:「アメリカにいるからよく知りません。」
Ｃさん:「ただの弟、あまり気にも留めていない」

Ｗと義理の弟の間には12歳の年齢差があり、弟の面倒は継母に見てもらえば十分と考えている。さらに、年齢が離れているため、共通の話題がなく、一緒に過ごす時間が少ない。Ｌさんは継父と継妹とは親しい関係だが、継兄とは一般的な関係である。彼女は、「兄に言うことはあまりない。彼は実の妹と同じで、男の子と女の子では共通の話題が少ないのでしょう」と言った。継きょうだいになるのは、親（または両親）の決定によって子供に与えられた非自発的な関係である。継きょうだいの年齢差、男女差、同居時間などが親密さにつながっているのである。親の再婚で継きょうだいが同居する時間ができたものの、年齢差や男女差に注意する必要がある。

6．まとめ

インタビュー調査から、ステップファミリーにおける継親と実親の役割分担に基づく子供の教育問題とニーズについて、子供が望ましい親役割は、①不公平を感じさせない取り組み、②継親子関係の調和に力を入れる、③子供が事実を知る権利を確保する、④子供の期待に気づき、付き合いのパターンを変える、⑤継きょうだいの年齢差や男女差に気を配る、の五つがあることを明らかにした。

しかしながら、ステップファミリーの複雑さは、本研究の範囲をはるかに超えている。四人のデータでは不十分である。なぜなら、ステップファミリーは、多世代にわたる水平方向に拡大した家族構造であり、その内部の脆弱性は外部の社会文化とも相互作用しているからである。現代社会では、家族の形態が多様化し、さまざまな研究から、家族は単に「血縁」でつながった集団ではないことが分かっている。中国に限らず、新たな家族のかたちが各国の既存の家族観やファミリィ・アイデンティティにいかに影響を与えるのか、また、将来の家族のありかたはどうなるのかを明らかにすることが、今後検討すべき課題となる。

文献

大谷尚（2007）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 －着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－」名古屋大学大学院教育発達 科学研究科紀要（教育科学）54（2）, 27-44.
王訳若（2017）「重组家庭亲子关系问题的社会工作介入研究 ---- 以西安市为例」, 陕西师范大学
久保恭子・宍戸路佳・坂口由紀子・倉持清美・田崎　知恵子・及川裕子・井上直子・刀根洋子・CHO Jeongwoo・劉海紅・後藤恭一（2018）「日中韓の祖母の孫育て・心理社会的な変化・子育ての世代間伝承との関連」東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ 69（2）pp327-336
菊地真理（2021）「多様な家族」の限界への挑戦－再婚後の別居親子の継続と共同養育の実践」『家族関係学』40: 25-34

小榮住まゆ子（2020）「わが国におけるステップファミリーの現状と子供家庭福祉の課題―ソーシャルワークの視点から―」人間関係学研究、第 18 号 23–34
黄光国（1985）「人情与面子」『经济社会体制比较』第 3 期
野沢慎司（2005）離婚･再婚とステップファミリー．吉田あけみ・山根真理・村井潤子（編著）ネットワークとしての家族（2005）．ミネルヴァ書房．pp.139-157
野澤みつえ（1989）「親業ストレスに関する基礎的研究」教育学科研究年報 , 15, p 35-56
野沢慎司・菊地真理（2021）『ステップファミリー子供から見た離婚・再婚』角川新書
野沢慎司・菊地真理（2014）「若年成人継子が語る継親子関係の多様性－ステップファミリーにおける継親の役割と継子の適応－」明治学院大学社会学部付属研究所研究所年報、44 巻 69 － 87
野沢慎司（2015）「ステップファミリーの若年成人子が語る同居親との関係―親の再婚への適応における重要性―」成城大学社会イノベーション研究、第 10 巻第 2 号 59 － 84
費孝通（1948）『乡土中国』观察社
山田昌弘（2007）『知恵蔵 2007』朝日新聞出版
黎海波（2014）「中国的血缘家族观与家族企业的低信任度文化、广州社会主义学院学报 2014 年第 2 期 p 39 － 42
『2019 年民政事業発展統計公報』（2020）中国民政部
Cartwright, C.（2008）.Resident parent-child relationships in stepfamilies. In J. Pryor（Ed.）, The international handbook of stepfamilies:Policy and practice in legal, research, and clinical environments（pp. 208–230）
Campo M., Fehlberg B., Millward C., Carson R.（2012）. Shared parenting time in Australia: Exploring children’s views. Journal of Social Welfare and Family Law, 34, 295-313.
Ihinger-Tallman, M.（1987）. Sibling and stepsibling bonding in stepfamilies. In K. Pasley & M. Ihinger-Tallman（Eds.）, Remarriage and stepparenting: Current research and theory（pp. 164–182）. The Guilford Press.
Lewis, J. M., & Kreider, R. M.（2015）. Remarriage in the United States（ACS-30）. Retrieved from U.S. Census Bureau
Pasley, K ., & Lee, M.（2010）. Stress and coping in the context of stepfamily life. In C. Price &S.H. Price（Eds.）, Families and change: Coping with stressful life events（3rd ed.）（pp. 233-259）.Thousand Oaks, CA: Sage.
Stepfamily Association of Japan（2017） ステップファミリーのおとなのためのきほんブックレット改訂版，13-14
Wiemers, E. E., Seltzer, J. A., Schoeni, R. F., Hotz, V. J., & Bianchi, S. M.（2019）. Stepfamily structure and transfers between generations in US families. Demography, 56（1）, 229–260.

謝辞／付記

本研究の遂行にあたり、教育学専攻の森先生、松岡先生、坂井先生、宮野先生、村井先生、岩槻先生、宮﨑先生、齊藤先生のご指導と W さん、F さん、L さん、C さんには、本論文のインタビューの回答の協力を感謝いたします。最後に、発達教育学研究室の皆様には、本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力頂きました。ここに心より感謝申し上げます。